

加群の自己同型群と導分環

首藤 武史

1. 初めに

[2] で講演者は次のことを示している：代数的閉体 k 上の有限次元多元環 A の根基 R が 2-nilpotent のとき、 A の自己同型群 $\text{Aut}(A)$ のリー環 $L(\text{Aut}(A))$ は A の R を保つ導分全体のなすリー環 $\text{der}(A)$ に一致する。その証明の方法は、以下に述べる性質をもつ R の 1 次変換のなす幾つかの空間の次元を調べるというものである。

$A=S+R$ を A の Wedderburn 分解とする。 S は A の Wedderburn factor (A の半単純部分多元環) である。 S および R の基底を併せて A の基底を構成するとき、 A の自己同型 σ の表現行列は次のようになる：

$$\sigma = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ \delta & \gamma \end{pmatrix}$$

$\sigma \in \text{Aut}(A)$ ということから、 $\alpha \in \text{Aut}(S)$ で、 δ, γ は次の等式をみたす：

- (1) $x, y \in S$ に対して、 $\delta(xy) = \alpha(x)\delta(y) + \delta(x)\alpha(y)$,
- (2) $\gamma \in \text{GL}(R)$ で、 $x \in S, u \in R$ に対して、 $\gamma(xu) = \alpha(x)\gamma(u)$, $\gamma(ux) = \gamma(u)\alpha(x)$.

A の導分 D で R を保つものも同様に

$$D = \begin{pmatrix} d & 0 \\ \delta & \Delta \end{pmatrix}$$

と表すことができる。このとき、 $d \in \text{Der}(S)$ で、 δ, Δ は次の等式をみたす：

- (3) $x, y \in S$ に対して、 $\delta(xy) = x\delta(y) + \delta(x)y$,
- (4) $x \in S, u \in R$ に対して、 $\Delta(xu) = x\Delta(u) + d(x)u$, $\Delta(ux) = \Delta(u)x + ud(x)$.

R は S - S 両側加群で、(1)~(4) はその上の作用であるが、 S の包絡環 $S^e = S \otimes S^o$ を考えると、これらはすべて左 S^e 加群上の作用で表される。これらを一般化して考える。

2. α 自己同型と d 導分

k を任意の体、 A を k 上の有限次元多元環、 M を左 A 加群とする。 $\alpha \in \text{Aut}(A)$ に対して M に新しい A 加群の構造が決まる：

$$x \in A, m \in M \text{ に対して, } x \cdot m = \alpha(x)m$$

このようにして決まる A 加群を M^α で表す. 単に M と書くときは初めに与えられた A 加群を表す. すなわち, $M^{id} = M$ である.

M の正則な 1 次変換 γ が M から M^α への A 加群としての同型であるとき, これを M の α 自己同型と呼ぶ. すなわち, 任意の $x \in A, m \in M$ に対して,

$$\gamma(xm) = \alpha(x)\gamma(m)$$

が成り立つこと. 従って, §1, (2) は γ が S 加群 R の α 自己同型であることを示している.

A の導分 d に対して, M の 1 次変換 δ が, $x \in A, m \in M$ に対して

$$\delta(xm) = d(x)m + x\delta(m)$$

を満たすとき, δ を M の d 導分と呼ぶ. 従って, §1, (4) は Δ が R の d 導分であることを示している.

命題 1. M は忠実な A 加群とする. したがって $A \subset E(M)$ とみなす.

- (1) γ が M の α 自己同型であれば, $\alpha(x) = \gamma x \gamma^{-1}$ ($x \in A$).
- (2) δ が M の d 導分であれば, $d(x) = [\delta, x]$ ($= \delta x - x \delta$) ($x \in A$).

3. Normalizers, Centralizers

命題 1 は A のある種の自己同型 [resp. 導分] が $E(M)$ の内部自己同型 [resp. 内部導分] から引き起こされることを示している. そこで A の ‘正規化’ を考える.

M を有限次元ベクトル空間とし, $G = GL(M)$, $\mathfrak{g} = \mathfrak{gl}(M)$ とする. 部分多元環 $A \subset E(M)$ に対して,

$$N_G(A) = \{ \gamma \in G \mid \gamma A \gamma^{-1} = A \},$$

$$\mathfrak{n}_{\mathfrak{g}}(A) = \{ \delta \in \mathfrak{g} \mid [\delta, A] \subset A \}$$

とおく. このとき, 命題 1 より群の準同型 ω および環の準同型 ω_* を得る:

$$\omega : N_G(A) \rightarrow \text{Aut}(A), \quad \gamma \mapsto \text{Int}(\gamma)|_A,$$

$$\omega_* : \mathfrak{n}_{\mathfrak{g}}(A) \rightarrow \text{Der}(A), \quad \delta \mapsto \text{int}(\delta)|_A$$

これらの像, 核をそれぞれ $\text{Aut}(A; M)$, $C_G(A)$, $\text{Der}(A; M)$, $\mathfrak{c}_{\mathfrak{g}}(A)$ とおく. 従って次の完全系列を得る:

$$(A) \quad 1 \rightarrow C_G(A) \rightarrow N_G(A) \xrightarrow{\omega} \text{Aut}(A; M) \rightarrow 1$$

$$(B) \quad 0 \rightarrow \mathfrak{c}_g(A) \rightarrow \mathfrak{n}_g(A) \xrightarrow{\omega_*} \text{Der}(A; M) \rightarrow 0.$$

$\text{Aut}(A; M)$, $\text{Der}(A; M)$ に関して, 次のことが分かる.

命題 2. M が A の (左) 正則表現のとき, $\text{Aut}(A; M) = \text{Aut}(A)$, $\text{Der}(A; M) = \text{Der}(A)$. 従って, A の自己同型はすべて $E(A)$ の内部自己同型から引き起こされ, A の導分はすべて $E(A)$ の内部導分から引き起こされる.

例 3. A が 1 つのべき零元から生成されているとする. このとき, 任意の (忠実な) A 加群 M に対して $\text{Aut}(A; M) = \text{Aut}(A)$ が成り立つ. しかし, $\text{Der}(A; M) = \text{Der}(A)$ は成り立たない場合がある.

H を $\text{Aut}(A; M)$ の部分群とし, $\Gamma(H) = \omega^{-1}(H)$ とおけば, 次の系列は群の完全系列である:

$$(a) \quad 1 \rightarrow C_G(A) \rightarrow \Gamma(H) \xrightarrow{\omega} H \rightarrow 1.$$

L を $\text{Der}(A; M)$ の部分リー環とし, $\Delta(L) = \omega_*^{-1}(L)$ とおけば, リー環の完全系列を得る:

$$(b) \quad 0 \rightarrow \mathfrak{c}_g(A) \rightarrow \Delta(L) \xrightarrow{\omega_*} L \rightarrow 0.$$

4. 代数群とリー環

この節では基礎体は代数的閉体とする. このとき, 系列 (A) は代数群と準同型の完全系列である. また, H が $\text{Aut}(A; M)$ の閉部分群のとき, 系列 (a) も代数群と準同型の完全系列である. リー環と準同型の微分を考えると次のリー環の完全系列を得る:

$$(C') \quad 0 \rightarrow L(C_G(A)) \rightarrow L(N_G(A)) \xrightarrow{d\omega} L(\text{Aut}(A; M))$$

$$(c') \quad 0 \rightarrow L(C_G(A)) \rightarrow L(\Gamma(H)) \xrightarrow{d\omega} L(H)$$

(c') における $d\omega$ は (C) での $d\omega$ の $L(\Gamma(H))$ への制限写像である.

代数群の表現の一般論より $L(N_G(A)) \subset \mathfrak{n}_g(A)$ で、 $d\omega$ は ω_* の $L(N_G(A))$ への制限写像である。

Remark. 基礎体の標数が 0 の場合には $N_G(A)$ のリー環は $\mathfrak{n}_g(A)$ であることが分かる ([1], § 13). この場合には、 $L(\text{Aut}(A; M)) = \text{Der}(A; M)$ が成り立つ。正標数の場合には一般に成り立たない。

例 4. 基礎体 k の標数は 3 であるとする。 $A = k[X]/(X^3) = k[x]$ を考える。 A の正則表現は忠実で、 $1, x, x^2$ を基底に選ぶと、 x, x^2 の表現行列はそれぞれ

$$x \mapsto \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \end{pmatrix}, \quad x^2 \mapsto \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

である。正規化群 $N_G(A)$ および中心化群 $C_G(A)$ を計算すると、 $\dim N_G(A) = 5$, $\dim C_G(A) = 3$ を得る。

一方、正規化環 $\mathfrak{n}_g(A)$, 中心化環 $\mathfrak{c}_g(A)$ は $\dim \mathfrak{n}_g(A) = 6$, $\dim \mathfrak{c}_g(A) = 3$. $\dim L(N_G(A)) = 5$ であるから、

$$L(N_G(A)) \subsetneq \mathfrak{n}_g(A)$$

となっている。

命題 5. $\mathfrak{c}_g(A)$ は $E(M)$ の部分多元環で、この可逆元全体のなす群が $C_G(A)$ である。とくに、 $L(C_G(A)) = \mathfrak{c}_g(A)$.

(a) の完全性より、 $C_G(A) = \text{Ker } \omega$, $\mathfrak{c}_g(A) = \text{Ker } \omega_*$ であるから ω は分離的で、従って (c') での $d\omega$ は surjective である。とくに、(C') における $d\omega$ も surjective である。

これまでに得られた 6 個の完全系列を再掲する：

$$(A) \quad 1 \rightarrow C_G(A) \rightarrow N_G(A) \xrightarrow{\omega} \text{Aut}(A; M) \rightarrow 1$$

$$(B) \quad 0 \rightarrow \mathfrak{c}_g(A) \rightarrow \mathfrak{n}_g(A) \xrightarrow{\omega_*} \text{Der}(A; M) \rightarrow 0.$$

$$\parallel \quad \cup \quad \cup$$

$$(C) \quad 0 \rightarrow L(C_G(A)) \rightarrow L(N_G(A)) \xrightarrow{d\omega} L(\text{Aut}(A; M)) \rightarrow 1$$

$$\begin{aligned}
\text{(a)} \quad & 1 \rightarrow C_G(A) \rightarrow \Gamma(H) \xrightarrow{\omega} H \rightarrow 1. \\
\text{(b)} \quad & 0 \rightarrow \mathfrak{c}_g(A) \rightarrow \Delta(L) \xrightarrow{\omega_*} L \rightarrow 0. \\
\text{(c)} \quad & 0 \rightarrow L(C_G(A)) \rightarrow L(\Gamma(H)) \xrightarrow{d\omega} L(H) \rightarrow 0
\end{aligned}$$

定理 6. H を $\text{Aut}(A: M)$ の閉部分群, L を $\text{Der}(A: M)$ の部分リー環とする. このとき, $L(\Gamma(H)) = \Delta(L)$ であるための必要十分条件は $L = L(H)$ であることである.

系 7. A の自己同型群 $\text{Aut}(A)$ が連結であるための必要十分条件は, A を正則表現によって $E(A)$ の部分多元環とみなすとき, $\text{GL}(A)$ における A^\times の正規化群が連結であることである.

参考文献

- [1] Humphreys, J.E. : Linear Algebraic Groups, GTM **21**, Springer-Verlag, 1975.
- [2] 首藤武史 : Radical が 2-nilpotent である多元環の自己同型群と導分環, preprint.